

「新しい世代が見た満洲」研究シリーズ第2集 第1回

世界史の中の満洲史とは何か？

日本大学文理学部史学科教授 松重充浩



本日は、私が企画をつとめました、

「新しい世代が見た満洲」研究シリーズ第2集の第1回目ということで、シリーズ第2集全体にわたる狙いといいますか、モチーフ、あるいは前提といったところのお話しをさせていただきたいと思えます、その上で、第2回以降の講演テーマの概要についても簡単にふれておきたいと考えております。

狙いをお話しする前に、シリーズ第2集のタイトル「世界史の中の満洲史とは何か？」にあります「世界史」という言葉ですが、少し私なりの使い方をしているとところもあり、最初に若干の説明をさせておいていただきたいと思います。

「世界史」の含意

今回のシリーズでの「世界史」という言葉は、単に各国史の総和という意味だけで使用しているわけではありません。確かに、「世界史」という言葉からは、

一定のユニットをもった各地域が歴史継承的に形成したそれぞれ個別の歴史の総和、よく言われるような言い方にすれば、各国史の総和というイメージが想起されます。それはそれで間違っているわけではないのですが、今回は、その個別の歴史の中に人類の歴史的な展開過程から見ていかなる先端部分というか到達部分があるのかに着目する視座を「世界史」という用語に付与したいと考えております。別の言い方をしますと、ある地域で起こったことで、他の地域でも起こりえる、

その意味で、人類が共有し得る「経験」となるような出来事を見いだす視座を「世界史」という言葉に込めております。

このことを今回のシリーズタイトルに即して言えば、満洲の歴史、それは個別的な展開の中で形成された正しく一回性を強くもつものなのですが、そのことを認めた上で、その歴史の中に、満洲の歴史ということだけで終わらない、人類史にとって先駆的というか、様々な条件と内実を異にしつつも共有していける事実や経験を見いだし、それが、なぜ、どのような過程を通じて生み出されていったのかを追究する視座をもって満洲史をみていくという意味合いを「世界史の中の満洲史とは何か？」に込めたということになります。



プロパガンダ・ポスター（資料1）

このような意味づけを私がおこなった背景には、満洲の歴史に、単なる懐古趣味や骨董的遺物、あるいは一般経験則的な箴言に止まらない内容が含まれていると実感しているからです。より具体的には、満洲史には今日の我々が直面している諸課題を検討する上で前提となる貴重な歴史的事例を提供し得る、換言しますと、満洲史には追究に値する今日的意義が内包されていると、私自身が実感しているからです。そして、その今日的意義に内包されていることが、本シリーズの狙いともなるのですが、まずは、その今日的意義についてお話しをさせてい

ただきたいと思っています。

満洲史における今日的意義の所在

「今日的意義」というものを考えるときに、どうしても押さえておく必要があることは、今日私たちが直面している課題（今日的課題）は何か、ということになると思われます。と申しますのも、「今日的意義」という時の「意義」は、「今日的課題」の「課題」に対して措定されるものだと考えているからです。そうした上で、私たちが直面している課題を考えてみますと、それこそ多種多様に

あるのですが、ここでは、満洲史の今日的意義という視点から、次の2つのことに着目して、話をさせていきたいと思います。即ち、グローバルゼーション（国際化）と日本の最先進国化ということです。

最初に、グローバルゼーションに関して話をしてみたいと

思います。この言葉は、日本では1980年代後半あたりから喧伝され始め、2000年代初頭には定着したような印象を私はもっているのですが、その過程で、私たちが直面した現実には、当初の樂觀的な予測、即ち、ある意味で世界が安定的で豊かな一体化に向かって進んでいくという予測を裏切って、国家とか、民族とか、文化とか、個人あるいは団体とかといった様々な主体が、激しく切り結びながら、絶え間ない相互連関と相互干渉、さらには相互変容を繰り返す過程でした。

とりわけ、2001年のいわゆる「9・11」（アメリカ同時多発テロ事件）以降は、そのことが誰の眼にも明らかになってきたという印象をもっております。そして、この現実には、改めて、私たちに、世界的規模で展開する様々な主体間における不断的相互連関と相互干渉、および相互変容の過程に、いかに対応していくのかという課題を突きつけるものでもありました。

次に、日本の最先進国化ということですが、これは日本が、高度経済成長を経て、1970年代後半に主に経済面で世界の最先進国化した状況を念頭においております。私なんかは、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」とか呼ばれて、当時

はなんだか嬉しくなったりしたもののなのですが、最先進国化するということは、もはや「お手本」がなくなるということを意味するものでもありました。

それまでの日本は、経済成長するにしても社会改革をおこなうにしても、どこかに先進国の「お手本」があったわけです。もちろん、その「お手本」を我が物にするために、それこそ我が身を削る思いの創意工夫と努力を重ねていたのですが、それでも一応確からしい「お手本」があり、その「お手本」を身につけていくことに関しては自信をもって臨める状況にありました。

ところが、最先進国化すると、もはや日本自身が問題を発見し、その問題を「お手本」のないところから解決していくことが迫られることとなります。言わば、答えを「創る」という状況に直面することとなったわけです。私は、インターネット情報を単純に切り貼りして卒論を作成しようとする学生に、「君

たちは、高校までは問題集の最後のところに解答が載っている問題を解いてきたけれども、社会ではそんなことはなくて、問題も解答も自分で創っていかなければならぬ場合に直面することがたくさんあるのだから、卒論では、その事前レッスンとして自分なりの問いと答えを創り出さなければならぬよ」といって叱咤激励することがよくあるのですが、あり体にいえば、学生だけでなく、私たち全体がそういう社会に突入したのだということです。この状況は、GDPレベルで日本が中国に抜かれた今日でも変わっていないと思われます。



プロパガンダ・ポスター（資料2）

以上お話ししましたように、グローバル化に直面している今日の私たちは、問題解決の前提に様々な主体の相互作用が常に存在すると同時に、その解決に向けての「お手本」がない状況に直面しているのですが、この状況に対して、メディアなどを通じてよく指摘されているのが、「日本（人）の脆弱性」とでもいうことです。もし仮に、その脆弱性なるものがあるとすれば、それもまた、私たちが直面する今日の課題ということになるわけですが、次に、それが、どのようなものなのかを一瞥しておきたいと思えます。

日本人の「脆弱性」

よく指摘される、「日本（人）の脆弱性」なるものの内容を概観してみますと、おおよそ次のような整理が可能ですではないでしょうか。

即ち、日本では、先に述べました今日の課題への対応を「創造」していく上で前提となる、異質なシステムや異者との交流に媒介された多様な経験と、その経験を存分に活かしていくところの開放的挑戦領域と鍛えられた公共意識が、歴史的に稀薄ではないかということです。

別言しますと、誰でも自由に議論に参加できるような議論の場がそもそも少ない上に、議論の参加者が固有の地位というか属性を離れて自由に議論をするということの経験はもちろんのこと、それが望ましいとする社会的共通認識も希薄だということです。そう言われますと、確かに、私たちは、大なり小なり、議論の場で、自らのポジションというか「分をわきまえた」行動をとっていることが多いし、他の参加者にも、「空気をよめよ」と言わんばかり、「沈黙」「忍耐」「察すること」をやかましく言ったりした経験があるのではないでしょうか。また、その反動というか、その裏返しで、我慢に我慢を重ねていた人が最後に鉄拳制裁に出るといった「大爆発」の現場にも出会った経験をお持ちの方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そのような経験をふまえますと、確かに私たちは「脆弱性」をもっているのかなと思ったりします。なぜなら、「お手本」の喪失と多様な関係諸主体を前提とした前述の今日的課題への対応には、中長期的な粘り強い追求が求められることが容易に予想され、指摘される「脆弱性」の内容がその予想に対する大きな障害となり得る側面があるからです。しかも、

この「脆弱性」は、日本の「単一民族」性とか、「島国根性」とか、歴史的帰結がもたらす、あたかも日本の「歴史的宿命」かのような説明も、まことしやかになされたりしております。

今、このような「脆弱性」に対する説明の可否は別としまして、ここでは、次の一点だけを確認しておきたいと思います。それは、日本は、そう遠くない過去において、前述した今日の課題と同様な前提、即ち、「お手本」の無い、多様な諸主体が相互に切り結ぶ現場で、中長期的な追求を求められる課題と格闘した歴史的経験を有しているということです。その象徴的な事例が、20世紀初頭から日本の敗戦後のいわゆる「引き揚げ」に至る満洲での日本人の活動実態です。

満洲の「世界史」性

たとえば、これは満洲国期の事例ですが、皆様もご存じのとおり、満洲国では「王道楽土」や「五族協和」という建国スローガンが標榜されていました。このスローガンは、それまでの「国民国家」という枠組みを越える側面も持ち、その意味で満洲国が内包した「世界史」性を象徴するものだったとも言えるのですが、

それは所詮建前にすぎないのではないかとすることも広く言われています。

事実、このスローガンをめぐる当時のプロパガンダ・ポスターを見ていますと、単に「飯が食える」とか（資料1）、それまでの中国人の吉祥をイメージした図柄（資料2）といった、既存の言わば手垢にまみれた豊かさのイメージを焼き直したものが多く、新たに「世界史」性の内実を具体的に明示し得ているといえるものは私が見てきた限りでは見当たりません。

しかし、ここで私が注目してみたいと思っておりますのは、今申し上げた既存イメージの焼き直しとは別に、子どもたちを意匠したポスター群が存在しているということです。これは、特に「五族協和」に関するプロパガンダ・ポスターに多く見られるのですが、そこでは「五族」を象徴する子どもたちが描かれており、しかもその子どもたちがどこかに向かって歩いている形で描かれているパターンが多く見受けられます（資料3）。

これは私の印象論をでるものではないのですが、このような子どもを意匠したポスターは、「五族協和」なるものを具體的な形で実行し得ていない現実を象徴的に示す事例となっていると理解してい

ます。現実には存在しない、しかし、それは将来的には現実化が求められるべきスローガンであるがゆえに、未来を象徴する子どもと、その子どもたちがどこかに向かっている姿で意匠されているのではないかと思われるからです。

ただ、その際、私が特に留意しているのは、スローガンの現実がないという事実そのものよりも、ない事実と直面しつつも、その実現を未来に託そうと、苦し紛れかもしませんが、もがきながらそのようなプロパガンダ・ポスターを作成していたという事実の方です。

この事実には、「五族協和」という国民国家の超克という側面を強く持ち得る、正しく「世界史」性をもつ課題に直面し、「世界史」性をもつゆえに「お手本」のない中で、多様な民族が相互連関・相互変容的に転換する現実に向かってもがき続けている人々が存在したことを予想させるものでもあります。

そういう視点から満洲国期の諸資料を見直してみると、結局実現されることなく挫折していくにせよ、このような課題と格闘していた人々の記録を断片的にせよ数多く見いだすことができます。

では、なぜ、このような満洲における、「お手本」のない、多様な諸主体が相互

に切り結ぶ現場で、中長期的な追求を求められる課題と格闘した日本人の歴史的経験が、今日、十分継承されることなく、前述した「脆弱性」に関する言説が説得力をもって展開される事態となってしまうのでしょうか。理由としては、様々な要因が考えられますが、ここでは、さしあたり次の2点のみを指摘しおきたいと思っています。

1つは、戦後日本の満洲史に関する研究では、満洲での日本人の歴史を所謂「二国史」の枠組みに閉じ込めてしまう傾向が抜き難くあったということです。つまりは、満洲の歴史を日本史の一部としてのみ語ってしまうという傾向があったということですね。これは、日本の「侵略」を明らかにするためにせよ、満洲の近代化と発展に尽力した日本人の業績を顕彰するにせよ、あるいは日本敗戦後の過酷極まる日本人の引き揚げと帰国後の厳しい現実を記録していくにせよ、戦後日本の満洲史に関する研究の多くが、日本人の主体性と主導性を強く押し出すあまり、そこに現実として存在し、日本人の活動実態を大きく規定していた、自然の多様性はもちろんのこと、多様な民族や社会集団の存在を、結果として等閑視する傾向を強く持ってしまったからでし

た。このため、満洲における非日本人の諸主体と日本人との相互連関・相互変容における実相を歴史的経験として継承する前提が失われていったと考えられます。

たとえば、満洲に関する戦後の歴史研究において大きな蓄積を重ねてきている「日本植民地研究」の経済史分野においては、日本側経済諸主体の総論的な経済構造や客観的な数量的な分析が精力的に進められる一方で、労働力や市場という面で現地の非日本人と日本人が日々いかなる関係実態を持っていたのかといった経営実態の追究を、日本の言わば暴力的な支配事例に止まらない領域まで踏み込む形で、資料発掘も含めつつ、遂行されてきたとは言いがたいものがありました。

もちろん、今申し上げていることは、日本人の主体性を大きく前面に押し出す研究や、そのことを基軸とした記録を残していくことが誤りであるというようなことではありません。ここで申し上げたいのは、日本人の主体性を全面に押し出すことだけでなく、今日的課題に即した視点からの研究や記録も忘れずにおこなっておくことが大切だったということですね。もう1つは、意識する、しないは別として、戦後の厳しさや、その裏返しでもある復興への強い希求が、あの経験をな

かったことにしてしま
うという、風潮という
か「空気」のようなも
のを戦後の日本社会に
もたらしていたのでは
ないかということです。

この点は、私自身の
満洲経験者からの聞き
取り経験からの限られ
た印象論に過ぎず、は
なはだ心許ないものな
のですが、戦後におけ
る満洲を経験していな
い者の大半にとって、

戦前・戦中の記憶や記録といったものは、
所詮「失敗」したものでしかなく、自ら
の行く手を照らす「指針」となるといっ
た実感を持ちようがなかったのではない
でしょうか。

別言しますと、その実相を細かく聞き
出し、記録し、共有し直すに値する対象
から脱落してしまったのではないでしょ
うか。その意味で、満洲経験者の経験の
詳細もまた、言わば「棄民」化されたと
いうような言い方も可能かもしれませ
んが、いずれにしても、相互連関・相互
変容の経験者からその実相をしっ
かり聞き出し、記録し、共有化する
ような作業が



プロパガンダ・ポスター（資料3）

なされないまま、その経験者の大半が鬼
籍に入られて今日に至っているというの
が現実だと思っています。

「外国史」からの視点と資料発掘・ 保存に向けての努力

では、こういう問題点を今から乗り越
えていくためには、どのような作業が必
要となるのでしょうか。別な言い方しま
すと、満洲史に今日的意義を吹き込み直
すためには、どのような作業が必要にな
るのでしょうか。私は、さしあたり次の
2つの作業が大切になるのではないかと

考えております。

1つ目は、満洲史から今日的意義を欠
落させてしまうこととなった要因の1つ
である、日本一国史的枠組みからの満洲
史像を相対化し、多様な関係性の総体と
してあった満洲の歴史実態を復元してい
くということです。

その際、私が有効だと考えているのが、
まずは満洲史を改めて「外国史」の視点
から位置付け直してみることです。
ここで外国史の視点から満洲の歴史を見
るということは、単に「別の見方がある」
という指摘、言い換えれば、各国史の羅
列の単純総和としての満洲の歴史を再構
成するということで日本一国史的枠組み
による満洲史像を相対化することを試み
ることにとどまるものではありません。
この作業は、それぞれが提示する
諸事実から諸主体の相互連関・相互変容
の実相を再構成していくための、その意
味では、それぞれの「外国史」からの満
洲史像も相対化し得る、言わば新たな地
域史としての「満洲史」像を構築してい
くための第一段階というようなことを想
定しております。

2つ目は、埋もれてしまっている相互
連関・相互変容に関する資料の発掘・保
存を今からでも諦めずに続けていくとい

うことです。

前述しましたとおり、相互連関・相互変容に直接立ち会った方々の大半は既に鬼籍に入られており、その実態復元の有力な手段となる聞き取り調査は極めて困難になってしまっております。とはいえ、その方々の日記、書簡、写真などの関連諸資料は遺族の手に残されている可能性は、まだまだ十分あると思われます。

事実、私が務めております日本大学文理学部には、昨年おこないました満洲に関する資料の展示会（「描かれた〈満・蒙〉―帝国「創造」の軌跡―」を契機に、「私の父（あるいは母）の満洲に関する遺品があるのだけれど寄贈したい」といった申し出がたくさん寄せられております。その大半は、相互連関・相互変容という視点からすれば、極めて断片的な事実を提示する、名もなき方々の資料ということになるのですが、私は、そのような断片的な資料でもあっても、集積していくことを通じて、1つの実態の復元にむけての重要な蓄積成果になっていくのではないかとの印象をもっております。もちろん、そのためには、それらの断片的な資料を一堂に会して総覧できるような言わば資料のプラットフォームのような場が不可欠となり、それはそれで大きな課

題なのですが、資料の継承が当事者からみて3代目以降となり、その消失が加速的に進んでいる現状をふまえれば、まずは資料の発掘・保存という作業が急務ではないかと感じているところです。

シリーズ第2集の狙いと次回以降のテーマ概要

以上、あれこれ満洲史との関連から私たちが直面している今日的課題についてお話しをして参りましたが、その内容を前提にしますと、シリーズ第2集の狙いは次のように整理できると思います。

本日の最初の方で私は、満洲の歴史には追究に値する今日的意義が内包されており、その内包されたものを明らかにしていくことが、シリーズ第2集の狙いともなると申し上げました。また、その今日的意義は今日的課題に対応して措定されるものだとも申し上げました。それらのことをふまえますと、満洲史の今日的意義は、「お手本」のない、多種多様な主体間において相互連関・相互変容的に形成された諸事象のプロセスと実態を明らかにすることにあるということとなり、それこそがシリーズ第2集の狙いというふうに整理できるのではないかと考えられます。



満洲国発行の紙幣

もう少し具体的に申し上げますと、「外国史」の視点から満洲の歴史を照らし出すことで、満洲史が内包する今日的意義の顕在化を阻んできた要因の1つである日本一國史的枠組みを相対化しつつ、その多様な諸主体の多様な関係性の総体

としての満洲史の再構成に向けての第一歩を提示できればと考えている次第です。

次回からの各報告は、この狙いに即して、研究の第一線で活躍されている、様々な「外国史」もしくは「ディシプリン（学理）」を専門とする若手や中堅の方から、それぞれの専門分野からみた満洲史について話していただく予定であります。最後に、各回テーマの概要について極めて簡単ですが紹介して、私の話を終えさせていきたいと思います。

まず、次回、第2回目は、「中国史」の分野から塚瀬進（長野大学教授）に、20世紀の満洲がいかなる歴史的継承体の下に形成されたのかを、明・清史期の満洲史研究の成果を駆使してお話いただく予定であります。それは、満洲の多様性や諸主体による相互連関・相互変容の実相が、20世紀に入り突然現れたのではなく、歴史継承的に形成された満洲の重要な「個性」として存在したことを明らかにするものとなるのではないかと考えております。

第3回目は、「ロシア史」の分野から麻田雅文（東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者）に、20世紀の満洲理解において不可欠な存在でありながら、従来十分な実証的把握がなされてこなかった

満洲におけるロシア（ソ連）の実態を、中東鉄道の展開を軸にお話しいただく予定です。

それは、仮想的であるにせよ提携対象であるにせよ、常に日本側の念頭から離れなかった、その意味で、常に日本側の満洲認識を規定し続けたロシア（ソ連）の実相がいかなるものだったのかを明らかにすることを通じて、日本一国的な満洲史像を相対化していく上で大いに役立つものとなるのではないかと考えております。

第4回目は、「経済学」の分野から平山勉（慶應義塾大学経済学部訪問准教授）に、経済学プロパーからみた満洲経済の特質を指摘してもらう予定です。そこでは、経済学のディシプリン（学理）という言葉が人類史の普遍性から照らし出される満洲の「世界史」としての特徴が示されるのではないかと考えております。

最後の第5回目は、「モンゴル史」の分野から青木雅浩（日本大学文理学部非常勤講師）に、従来の満洲の歴史では「内モンゴル」に比してその連関性の実相を追究されることが少なかったいわゆる「外モンゴル」に着目し、そこからみた20世紀満洲の特徴を話してもらう予定です。

それは満洲における「民族」の多様性

と重層性がおりなすダイナミズムの広がり

と深さを改めて明らかにしていく契機になるのではないかと考えている次第です。

皆様には、いま申し上げました次回以降の講演にもぜひご参加いただき、「世界史の中の満洲史」の諸特徴にふれていただき、豊かな可能性を秘めた満洲史像の再構成していく第一歩の契機としていただければと願っている次第です。

本日はご静聴いただき、誠に有り難うございました。

（9月19日・公開フォーラム）

講師略歴（まつしげ みつひろ）

1960年 山口県生まれ

1985年 早稲田大学第一文学部東

洋史学専攻卒業

1989年 広島大学大学院文学研究

科東洋史学専攻博士課程

後期単位取得退学

外務省外交史料館『日本

外交文書』編集担当

1995年 県立広島大学国際文化学

部准教授

2002年 日本大学文理学部准教授

2004年 同教授

主要編著 『満洲』の成立 『20世紀満洲歴史事典』『蒋介石研究』